

あ と が き

『阿波学会紀要』第51号は、平成16（2004）年度に行った木沢村総合学術調査報告書である。木沢村では、平成16年度に2つの大きな出来事があった。平成16年7月31日未明から続いた台風10号による豪雨災害と、那賀町の発足にともなう平成17年2月28日の閉村である。

前者については、大用知地区をはじめ村内各所で土砂災害が発生し、2名の尊い命が奪われたほか、家屋の全半壊や国道・村道の寸断、電気・電話の不通など、未曾有の被害をもたらした。阿波学会では8月5日に予定していた総合学術調査の結団式を、災害復旧活動に合わせて10月8日に変更し、総合学術調査では被災された多くの住民の方々から多大なご協力を賜った。誌上を借りて関係各位に感謝申し上げるとともに、一日も早い復旧を祈念する次第である。本報告書では、地質班がこの豪雨災害に関わって特別報告を寄稿したほか、豪雨災害の影響について言及されている報告も少なくない。

もう一点、「平成の大合併」の下に、全国各地で市町村合併が進んでいる。徳島県下で最も人口が少ない「木沢村」では、平成17年3月1日の那賀町の発足にともない、那賀町役場木沢支所は残るものの、地名としての村名そのものがなくなる。そのため、木沢村では『木沢村誌』を編纂している。編纂事業は本号（木沢村総合学術調査報告書）と並行しており、総合学術調査の成果については、『木沢村誌』に活用してもらえることになっている。

木沢村のこの2つの出来事は、阿波学会活動の一端を象徴しているようにも思われる。すなわち、阿波学会活動に参加している研究者は、災害のような突発的な出来事に対しても、それを学術的な知見にもとづいて分析・説明することが求められよう。そうした知見は、自然・人文・社会現象を問わず、研究テーマに関する日常的な観察と探求なくしては、得られることはない。今回の報告書の中には、そうした視点や成果が活かされている。

他方、阿波学会はこれまで、1市町村を単位として総合学術調査を行ってきた。徳島県はこれまで50市町村を数えたが、平成18年4月1日には24市町村となる予定である。阿波学会紀要第1号（『徳島県郷土研究論文集』）が発刊された昭和29（1954）年当時も、「昭和の合併」が進んだ時期であり、新たな市町村の誕生は阿波学会に活力を与えてきた。しかしながら、今後合併が予定されている自治体も含め、まだ9旧町村の総合学術調査が終了していない。これは、阿波学会に課せられた宿題でもある。総合学術調査が契機となって、地域資源・地域資産が再認識され、新たな「まちづくり」に寄与してきた点は阿波学会の大きな成果である。今後とも、関係機関・団体ならびに会員諸氏のますますのご協力をお願いするところである。

最後になるが、『阿波学会紀要』の発刊は本会活動の大きな柱である。編集委員ならびに事務局には多大な労力と時間を割いて協力いただいております。この場を借りて感謝申し上げます。また、執筆者には今後とも、こうした編集作業にご理解、ご協力をお願いする次第である。

（平井松午）

阿波学会編集委員会

| | | | | | |
|-----|-------|------|-------|-------|--|
| 委員長 | 平井 松午 | 副委員長 | 石田 啓祐 | | |
| 委員 | 石尾 和仁 | 小川 誠 | 近藤 孝造 | 仙波 光明 | |
| | 中野 真弘 | 松浦 一 | 村上光太郎 | 和田 賢次 | |